

細胞診指導医会 会報

No. 6 Nov. 1991



細胞診の発展と私の思い出



長崎大学医学部産婦人科
山 辺 徹

細胞診は1941年に Papanicolaou が子宮癌の診断法として発表したのにはじまる。これは、ヒトの場合にも腔上皮の剝脱細胞の所見が性周期の判定に有用であることを証明した際に、たまたま剝脱した子宮頸癌細胞が出現しており、癌の診断に応用できることに気づき、細胞診による癌診断法として提唱したのである。細胞診それ自体の考えは、古く Beale (1860年) にはじまるとされ、腔壁の剝脱細胞から月経周期を知ろうとする試みも、すでに手がけられていた。このような中で、細胞診による癌診断法の実用化を求めたのが Papanicolaou である。Pap. 染色の特色は、湿潤固定法の採用により、重積した細胞であってもそれぞれの形態学的所見を把握でき、Orange G の色素によって、剝脱した扁平上皮細胞の成熟度ないし角化の程度を判別できるようにした点にある。この固定・染色法の発案が細胞診の価値を高めたのは確かであり、今日でも多少の改良はあるにせよ、同様の手技が受けつがれている。当時より Papanicolaou は癌の判定に個々の細胞における異型の他に、細胞集団における配列や多形性に注目しており、そのために湿潤固定を用いた点が評価されるわけである。その後、細胞診は多くの追試と一方では批判のある中で台頭してきた。彼は癌細胞の形態学的特徴として、特に N/C 比増大、

クロマチン増加および核小体肥大などをあげた。しかし反論もあり、病理学者の批判の焦点は、これらの所見がときに過形成や胎生組織でもみられ、しかも必ずしもこれらの特徴を示さない癌細胞も存在し、癌の組織型によっても細胞所見は異なること、さらに最も問題視したのは、間質浸潤を証明せずして癌の診断はあり得ない、ということであった。このような背景の中で、病理学者である Foot が剝脱細胞学を癌の診断法として取り入れ、Papanicolaou の理論を支持したこともあって、この方法を容認する人たちが少しずつ増え、一般に普及し、実用化されるにいたったようである。そして喀痰、胃液、体腔液あるいは尿などにおける剝脱細胞にも、癌の診断法として応用され、実用化されるようになった。いわゆる剝脱細胞学と呼ばれた時代である。

細胞診の普及に障害となったひとつは、癌陰性例の鏡検に長時間を要することであり、当時としては、そのスクリーニングを検査技師に依存するともなれば、無資格の技師が陰性の診断をくだすことになり、しかも人件費の問題もあったことと思われる。そこで、米国において細胞診技術者のライセンス制が導入され、さらにわが国をはじめ、諸外国においても細胞検査士の制度が設けられて、今日のようなシステムにつながったものといえ

る。この間、歴史的には、cell block 法 (Zemansky) との併用も行われ、これによって陽性率の向上がみられたという報告も見受けられる。

穿刺吸引細胞診が Stewart により紹介され、さらに擦過細胞診の有用性ととも、細胞診は各領域でますます普及し、最近では、内視鏡や超音波断層法のもとで、病巣からの細胞採取が行われ、また術中細胞診の価値も認められている。このような臨床の手技の拡大とあいまって、各領域、各臓器ごとに、組織像との対比および正常母細胞との形態学的隔たりから詳細な細胞所見の分析がなされ、さらに種々の染色法の他、酵素抗体法などの導入もあって、今日では単に良性か悪性かの判定だけでなく、腫瘍の組織型の判定も要求され、細胞診断学と呼ばれるようになった。また組織学的検索と同様、研究レベルにおけるひとつの手法としても活用されるようになってきている。

日本臨床細胞学会においては、細胞診指導医と細胞検査士の制度が確立し、現在 (平成 3 年 9 月) では、1,101 名の指導医と 3,666 名の細胞検査士がペアを組んで、実地臨床における細胞学的診断に貢献している。また昭和 58 年 2 月から老人保健法が施行され、その一環として、子宮癌および胃癌検診が行われてきた。さらに昭和 62 年度より子宮癌検診の対象に体癌が加えられ、肺癌および乳癌も新たに導入された。これらの検診において、細胞診が大きな役割を果していることはいうまでもないが、特に子宮頸癌および体癌の一次検診はすべて細胞診によるスクリーニングにより実施されている。

私は大学の学部二年次 (昭和 26 年) の春休みに、ある先輩に頼んで病理学教室 (林一郎教授) に組織標本をみせてもらいに行った。ところが、私が外式カラーフィルム (当時は今のような内式カラーは発売されていなかった) の現像ができ、推計学を少しかじっていたことが重

宝がられて、毎日、講義や実習がすむと教室に顔を出すようになり、居心地がいいこともあって、卒業後もそのまま病理学教室に残る結果となった。わが国では、細胞診は戦後に導入されたが、当時、私が毎月講読していた雑誌に「子宮癌の早期発見」という座談会が掲載されていた。その中で、藤井吉助教授 (昭和医大産婦人科) が次のようなことを話されている。「今から考えてみると、15, 6 年前であります、子宮癌の早期診断という試験問題に対して、学生は頸管分泌、腔分泌物から癌細胞を発見する、こういう答案を書いた。当時、私はこんなうまい方法があればよいが、点数にはならんぞ……、といった。考えてみるというと、あの時よく調べておればよかった。こう……ひやっとする思いがいたします (日本臨床, 11 巻, 708 頁, 昭和 27 年)」。このことを病理の先生に話したところ、細胞診は簡便ではあるが、組織診の方が種々の面で優位であるといわれ、私自身も間質浸潤を証明できなくて、単一細胞でどうして癌の診断ができるのだろうか、単純な疑問を抱いた。これがきっかけで、大枚をはたいて購入した書が Papanicolaou の Atlas of Exfoliative Cytology (バインダー式であるが、追録は出なかった) と、Vincent Memorial Laboratory の The Cytologic Diagnosis of Cancer の 2 冊である。その後、昭和 35 年に現在の産婦人科に移った。

産婦人科学教室では、その当時はもちろん細胞診は行われていたので、組織標本と対比して診るようになった。当時、助教授をされていたのが故藤井純一博士で、その後、癌研婦人科に移られたが、昭和 43 年、先生の奨めで日本臨床細胞学会に入会した。本学会の会員になったことによって、今日まで婦人科病理学に細胞診断学を導入でき、また各領域の多くの方々からもいろいろと知識を学ばせていただいた。それによって、形態学的考え方に幅のできた点を痛感している次第である。





水野潤二先生を偲んで

臨床細胞学会京都府支部長
安田医院
安田 迪之

本学会名誉会長であった恩師水野先生の遺影が学会誌91年4号の巻頭に飾られました。もう3回忌も近いので弟子のひとりとして先生を偲んでみたいと思います。

私と水野先生との最初の出会は、私の父と先生が京都大学の同級生で同門だったので先生が父の診療所に寄られた時でした。昭和30年代のはじめ、私がまだ京都大学の教養部時代のことで先生はIACの創設のため米国に行かれた後で、その時のスライドを私たちにみせて下さいました。その後、私が関西医大に転学し、産婦人科など学習中に突然教授の交代があり、思いもかけず水野先生が着任されたのです。それからはポリクリ、インターン、結婚、大学院、そして昭和46年10月父の突然の死により京都で開業するまでずっとご指導いただきました。

入局以来細胞診の手解きを直に受け、学会の初舞台も第4回の本学会総会でした。パパニコローの図譜の画が日本人の手になることも教えられ、また米国にはサイトスクリーナーという職業があり、有資格者の一部は家庭でスクリーニングを行っている人もいと聞かされました。後に日本に細胞診の高等研修が開設されたときには、私も大阪の成人病センターで開業するまで講義を続けました。

ご存知の方も多いと思いますが、先生はヘビースモーカーではありましたがお酒は好きでなく、趣味も庭の手入れと畑作りくらいでとにかく学問一筋の明治人間でした。弟子の私たちとしては窮屈な面が多々ありましたが、その反面思い遣りが厚く、手術などで帰宅が遅くなることをナースステーションから電話していると途中で受

話器を取って家内に「いつも遅くなって……」と声を掛けて下さることもたびたびでした。したがって、私たち弟子も水野先生のためならと昼夜なく研究のお手伝いをしました。金沢での特別講演のための原稿作りに追われて、妹の結婚式をスッポかしたこともありましたが、細胞学会にスライドセミナー（当初はスライドカンファレンス）を導入されたのも先生でした。京都に細胞学会の支部を作るときには顧問をお願いし、設立総会では記念講演もしていただきましたのも思い出の一つです。私は開業後も週一回大学の細胞診室に非常勤で顔を出していますが、病気をされてからの先生は泌尿器科の外来に来られるたびに細胞診室をのぞかれ、私がいれば雑談できるのを楽しみにされていたようで、お庭でとれた果物などをお土産に下さいました。Maurice, Goldblatt 賞受賞の記念パーティに使う資料を取りに先生のご自宅を幾度かお訪ねしたのですが、当時先生はひとり住いでしたので、アルバム探しに往生したのが昨日のこのように想われます。

指導医会のメンバーも若い人たちが増え、恐らくもう半数の人は水野潤二先生とは面識のない時代になったのではないのでしょうか？ 水野先生のお墓は京都東山の知恩院にあります。知恩院の裏山の小高い墓地で、近くにノーベル賞の湯川秀樹博士のお墓もあります。知恩院の山門は昭和61年総工費7億5千万円で解体修理に着工し来年3月に完成予定です。ご希望の方には地図をFAXでお送りします。

FAX 075-561-0288



専 門 家

香川医科大学母子科
半 藤 保

世の中に専門家と称される人はたくさんいる。身の回りの医師、助産婦、看護婦、保健婦、技師はもとより、弁護士、税理士、教師など、かぞえあげたら切りがない。特殊なものを除き、専門家というものは社会的に広く認知され、人々から尊敬される。尊敬はされないまでも信用される。専門家はその道について、他の人の知らないことを知っており、その知識を実行に移すノウハウを身につけている。また、一般的にその結果は人間にとって有益であり、見方によってはなくてはならないものとさえなっている。世の中が複雑になり、また学問が進歩してくると、専門家の種類も増してくる。かつて私の身近にいた眼科用メス砥ぎの専門家、酒の肴の専門家、閨房の専門家、物騒な爆弾作りの専門家、などなど楽しい専門家もあれば凶悪犯罪の元凶をなす専門家まである。しかし、こと医療の分野における専門家は貴重な存在であり、尊ばれるものである。

ふり返って、わが日本臨床細胞学会に話をあてはめてみよう。学問の進歩によって30数年前に本学会は公式に発足した。その源流をさかのぼることは、ひとまずおくことにする。そして細胞診指導医や細胞検査士認定制度はさらにあとからできたものであるが、それでもすでに細胞診指導医数は1,000名を越し、細胞検査士数も3,500名に達しようという盛況である。これらの細胞診断学に携わる専門家集団は、その予備群と目される明日の細胞診指導医、明日の細胞検査士らとともに斯学の発展にたゆまぬ努力を続け、研鑽を積み重ね、肺、乳房、子宮、消化器など多くの臓器癌の診断や婦人科内分泌細胞などに大いに貢献している。老人保健法にまつわる集団検診事業には、これらの専門家集団が単に法的のみならず、実質的に中心的役割を演じている。以上ここまでの事柄は、日本臨床細胞学会関係者にとっていわずもがなの内容であるが、これが医学界全体からみてどれほどの位置づけをされ、世間の人々にどの程度認識されてい

るかとなると、当事者の予想に反ししばしば全く期待外れである。日本臨床細胞学会の日本医学会分科会への加盟申請一つをとっても、関係者一同の永年にわたる、用意周到ななみなみならぬ努力にもかかわらず、またも先送りされてしまった。医師の中にさえ細胞診指導医の存在を知らない人は意外に多い。細胞診断学が従来病理、産婦人科、消化器科、呼吸器科など特定診療科のそのまた一部の診療にしかかかわっていないこと、細胞診指導医がふえたとはいっても20万人を越す医師数全体からみれば、まだほんの一握りの人数にしかならないこと、他の学会に比べ日本臨床細胞学会や、そこが主管する細胞診指導医・細胞検査士制度の歴史が浅いこと、など理由はいろいろであろう。細胞診断学そのものが、実地臨床上重要なわりに地味な学問であり、診断法であって治療法でないこと、多くの場合癌のスクリーニング法であって確定診断法でないこと、診断行為そのものは人目のつかないところで営々と行われていること、などが多くの方がたの認識を得にくくしているものと考えられる。患者さんの側からみると、細胞診の言葉さえ知らない人が大部分である。安心し、信頼して診てもらえる診療行為を裏で誰が支えているかは、患者にとって知る必要がないのであって、専門家にやってもらっているという言葉だけで十分なのである。しかし、細胞診指導医や細胞検査士など仲間の著しい増加と、社会的活動とのかかわり合いの広がりとは、とりもなおさず細胞診断学の重要性を裏づけるものであり、細胞診断学の学問的、社会的ニーズの“あかし”でもある。

専門家は専門を貫いてこそ尊い。学問の進歩によって細胞学は間口も奥行きもさらに幅広く、深くなってきた。専門家集団としてわれわれの進むべき道は深遠である。日本医学界や社会における細胞学の認知に時間は要しても、その重要性は着実にあまねく滲透しつつある。



細胞診との関わり

国井婦人科病院（山形市）

国井勝昭

私が大学入学（昭和33年）当時、すでに亡父（前国井病院院長）は細胞診を実際に行っており、父から細胞診という言葉は初めて聞きました。当時は H.E. 染色の細胞診標本で、細胞診を教えてくれる人もなく、Vincent Memorial Hospital の Staff の著書などをみながら、独学で診ていたようです。

その後、大学を卒業し医局（昭和大学大学院産婦人科）に入ると、その当時細胞診は染色から診断まですべて新入生の仕事（最初の数ヶ月の教育期間の後）でした。私はその年度ただ一人だけの入局者だったため非常に忙しく、何だかんだと逃げ回って、とうとう医局にいる間には一枚も細胞診標本をみませんでした。仕事も抗生物質に関する研究でした。

大学院卒業間近の昭和43年に父が病に倒れたため、私は家（山形市）に帰って診療に従事することになりました。

昭和46年に東北大学で卒後研修をやるということを知り、弟から聞き、私も特別参加させてもらい、その時初めて子宮癌および細胞診について正式な講義をうけました。

その講義のなかでとくに印象深かったのは、野田起一郎先生の子宮頸癌の講義において「子宮頸部は毎晩のように刺激があるところなので癌ができやすい」といわれたことです。

当時は鈴木雅洲教授時代で、私は他大学の出身なのですが、全く区別なくいろいろと教えてもらったり、二次会にまで連れていってもらったことを今でも感謝しております。

その後、癌研で指導をうけていた私の昭和大学の後輩の高橋享正先生から、ラルストロン（遠隔操作式体腔内照射装置）が当時癌研にあり、これはいいものだよと彼に教えられました。

あとになり（昭和51年）、私も私の病院に導入したところ、業者から東北では初めてだといわれ驚きました。

私の父は早くから癌の治療（広汎性子宮全摘およびテレコバルト、ラジウム針による放射線療法）を行っていたため、当時は癌の患者も多かったのですが、その治療の成果を知るには当時内診と組織診でしか調べる方法がなく、自分で細胞診が診られるようになったら、治療しながらその効果を判定できると考え、細胞診を勉強しようという気になりました。

そこで、昭和50年高橋享正先生に紹介してもらい、癌研細胞診において細胞診の指導を受けることになりました。その折に群馬の今井昭満先生、飯能中央病院の金先生と親しくなりともに細胞診を勉強しました。そして2ヶ月ほど勉強した後、米子で行われた指導医認定試験を受けたところ、見事に三人とも不合格となり、三人で愚痴をこぼしたのを覚えています。

また、その時中学校（山形大学付属中）の同級生である長谷川寿彦君（現、栃木病院産婦人科部長）に久しぶりに会ったので「何だおまえも試験を受けにきていたのか」と気軽に声をかけたところ「いや俺は、若いものが受験するんでその監督にきているんだ」といわれ、ますますショックを受けました。しかし、長谷川先生にはその後細胞診のことでいろいろ指導をしてもらったり、便宜を計ってもらったり、大変お世話になっております。

その年の秋、さらに勉強して指導医認定試験（宇都宮）に受かったのですが、受験の後、解答は大体合っているようなので合格祝とばかり癌研の技師さん達と飲みに行きました。その折、途中から変なおじさんと友達になり、癌研の人達が帰った後もその人と飲み続け、そのうちに何が何だかわからなくなり、気がついたときは宇都宮の駅のベンチで朝の5時頃寝ていたという、まさに植木等の「気がつきゃホームのベンチでごろり」という歌の文句そのままの状態でした。そしてその前日、雨が降ったせいで背広はぐっしょり濡れており、ポケットをさぐるとわずか千円くらいしか残っていませんでした。

その後癌研の人に会ったら、「先生はあの人にずい分乗せられていたものねえ」といわれました。どうも何か強い酒を飲ませられたようでした。しまったという気持ちもありましたが、それ以上に試験に受かったという喜びの方が大きかったと思います。

指導医には昭和54年になりました。当時細胞診指導医の試験は、婦人科、呼吸器、消化器、液状検体と四課目に分けられていて、群馬の井上先生と何々先生が全課目受かっているというのを聞き、私も全課目受験しようと思いました。

当時山形市には呼吸器の指導医がいなかったものから、まず昭和55年千葉で行われた試験に再び呼吸器課目を受け、合格しました。そのうちに指導医試験の課目が変わり、総合科ができたので昭和56年総合科一回目の時に受験し、何とか合格しました。

学生の頃から一夜漬の習慣がついているので、呼吸器のときも総合科のときも顕微鏡を下げて行って主要な標本を一晚のうちに復習するという方法で受験しました。四課目受験するつもりでしたが、総合科を受験したことで消化器も含まれているので消化器だけの受験はやめてしまいました。

その後FIACの試験を受けました。このときには武田鉄太郎先生、東岩井先生、半藤先生など錚々たる人達と一緒にでしたが、試験が終わったときは、私も含めてかなりの人が、「今回はだめだ」と思いました。しかし全員合格ということではっとしました。

山形県では昭和45年頃から、山形のスクリーナーおよび技師さんを中心とした細胞診の集まりがあり、われわれ医師はゲストとして参加していました。

しかし、医師も正式に会員になれる会があればいいと思っていたところ、日本臨床細胞学会では各県に支部を作る意向らしいという情報があり、山形県支部を作ろうということになりました。すでに隣の福島県では全国で

もいち早く支部ができており、これは後に聞いた話ですが、各県すべてに支部ができるかどうかは、山形県支部が認可されるかどうかにかかっているということでした。

支部会設立には種々問題がありましたが、山形県の技師、医師ともども支部を作ろうという意向が強かったのと、また初代山形県支部長熱海先生の決断があったからこそ支部設立のはこびになったのだと思います。昭和56年山形県支部発会式が行われ、天神美夫先生（当時日臨細胞学会会長であった）がご挨拶をされ、またご講演をさせていただきました。

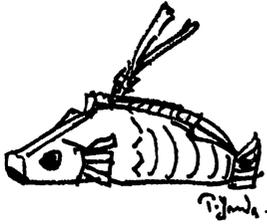
私は米子の第16回日本臨床細胞学会大会以降すべて出席し、演題も東京で行われた第18回大会以降、国際学会も含めてほとんど出しています。これは、幸い私のところにはスクリーナーが3名いるということ、弟と二人で病院をやっているため、抜け出せるからだと思っています。

昭和59年度より老人保健法実施に伴う細胞診従事者講習会が山形県主催で、年12回開催されることになりました。実際に講師の方をお願いしたり、会場の設営など実務は山形県支部会員が行っているわけですが、おかげでいろんな先生のご講演を聴くことができ、親しくお話をする機会を得ました。また、従事者講習会に限らず、細胞診をやってきたおかげで増淵先生をはじめ多くの先生方とお近付きになれることができましたことを喜んでおります。

細胞診に優れている先生は他の面でも優れていることが多く、また人間的にも魅力のある先生が多く、いろいろと教えられたり、感銘を受けたりすることが多々ありました。「細胞診をやっていてよかったなあ」というのが私の結論で、今後とも頑張っていきたいと思っています。



私でお役に立てるなら



日本医科大学付属多摩永山病院病理部

前田 昭太郎

突然の依頼に辞すべきであったのだが、つい引受けてしまったこの原稿である。けれど、私の常日頃のモットーとして「私でお役に立てるなら」という精神で若輩を顧みず書き始めました。

思えば、私の細胞診との運命的な出会いは今から10年前である。杏林大学の病理学教室に籍を置いていた当時は、細胞診を知らなくても何とか病理医として勤まっていた。しかし、10年前、中央鉄道病院院長の上田英雄先生、中検部長の玄番昭夫先生から中央鉄道病院への就職を勧められた。「私でお役に立てるなら」とお引受けし、大学を去った。「中央鉄道病院で毎月1回細胞診の勉強会を開くので、病理組織の講義を担当してもらいたい」と検査技師の方々からの依頼があり、「私でお役に立てるなら」と引受けた。それから現在の日本医科大学に移るまでの数年間、今では学会で大いに活躍しているベテラン細胞検査士の人達との毎月1回の細胞診勉強会が開催された。勉強会が終わったあと、1,280円の飲み放題、食べ放題のジンギスカン料理店で、「今日は何皿食べられるか新記録に挑戦しよう」と皆で酒を飲み、大食いした当時がなつかしい。年に1回は、泊り掛けの細胞診勉強会に出かけ、旅館のふすま障子にスライドを投影し、夜を徹して議論しあい、勢い余って障子に差し棒で、いくつも穴を開けてしまったことなどが今では走馬灯のように思い出される。この細胞診勉強会のおかげで、無事細胞診指導医の試験にも合格できた。

今から6年前、日本医科大学老人病研究所教授の金子仁先生から、「前田君、日本医科大学の病理にこないかね」とお誘いがあった。当時、中央鉄道病院には常勤病理医が2人いたので、早速「私でお役に立てるなら」と二つ返事でお引受けし、現在にいたっている。その間、「多摩永山病院において細胞診と組織診の講義をして欲しい」という病理の技師の皆さんの依頼で毎月1回細胞診の講習会を行っている。最初数人で始めた講習会もい

つの間にか人数が増え、現在では50名を越え、この9月で第61回を迎えた。食堂の壁にスライドを投影し、食器洗いの音を気にしながらの勉強会である。遠くは静岡、千葉など遠路はるばる多摩永山病院まできて、土曜日の午後4時から10時頃まで一心不乱に講習を受けている検査技師、若い病理医の姿をみるたびに、身の引き締まる思いがしています。また、指導医の先生方に多摩永山病院までご足労を煩わし、熱心に講義していただき、感謝しております。

今から3年前、日本医学技術専門学校校長、中嶋唯夫先生および教務の先生方から「専門学校として細胞診に力を入れたいので協力して欲しい」旨、依頼があり、「私でお役に立てるなら」とお引受けしたのが、細胞診講習会夜間6週間コース開催のきっかけとなった。中嶋唯夫先生がご懇意であった関係で、日本細胞診断学協会理事長の天神美夫先生には、講習会開催のために随分ご尽力いただきました。8月の暑い夜、毎日6時半から9時半まで仕事で疲れきった検査技師の人達が一生懸命受講されている姿をみるにつけ、責任の重大さを痛感しています。また、夜遅くまで熱心に講義、実習を担当して下さる指導医、細胞検査士の皆さんに心より感謝しております。また、講習会のおかげで延べ100人を越える指導医の先生方の講義をお聞きすることができ、細胞診の敵しさの反面、面白さも最近少しずつわかってきました。多摩永山病院および夜間6週間コースの講義の他、あちこちの講義を引受け、少々ばてぎみではありますが、充実した日々を送っているこの頃です。

最初に細胞診の勉強をするきっかけを作ってくださった故玄番昭夫先生、「細胞診頼むよ、前田君」といつもいっておられた故金子仁先生、第1回細胞診講習会6週間コース受講生が全員細胞検査士になり、大喜びされていた故中嶋唯夫先生に、草葉の陰で喜んでいただけるような細胞診講習会を今後も続けていけるように頑張りました。

いと心を新たにしています。指導医の先生方に今後とも
ご協力いただきたく、この紙面をお借りしてお願い申し

上げます。

International Tutorial on Clinical Cytology について

獨協医科大学外科
信田重光

本年5月8日(水)より14日(火)までの6日間、第17回 International Tutorial on Clinical Cytology を千代田区平河町の日本都市センターで開催させていただいた。お陰様で Full Registration 180名、Lecture only 20名の定員を全部満たして、無事全スケジュールを終了させていただいた。このうち外国人は Full Registration 韓国28名、台湾4名、インドネシア2名、香港2名、オーストラリア3名、アメリカ1名、Lecture only オーストラリア3名であった。会運営について増淵名誉会長先生、高見沢学会長先生をはじめ、学会理事、評議員、細胞診指導医および検査技師の先生方に種々ご協力いただいたことに改めて篤くお礼申し上げる。

この Tutorial は国際細胞学会 (International Academy of Cytology, I.A.C.) が主催し、本会を行う国の学会が協同行うもので、表のごとく1970年にはじまった。以後、毎年または一年隔きにオーストリア・ウィーンを中心に世界各地で行われている。

この Tutorial は、IAC が中心となって世界各国における細胞診断学の普及、および細胞診従事者の教育と専門家の再教育の場として行われるもので、アメリカでは American Society of Cytology (ASC) がこの方式の Tutorial を国内各地で行っているの、International Tutorial としてはアメリカでは行われていない。わが国の日本臨床細胞学会教育委員会主催の医師向けの“細胞診断学セミナー”や技師向けの“細胞診講習会”は同様の思想のもとに行われている。

Tutorial のスケジュールは Prof. George L. Wied が中心となって、IAC の Committee on Continuing Education の中の Program Committee で立案されて、

1.	June 14-20, 1970	Vienna, Austria
2.	June 10-18, 1972	Vienna, Austria
3.	August 10-15, 1973	Tokyo, Japan
4.	October 11-19, 1974	Vienna, Austria
5.	October 24-31, 1976	Vienna, Austria
6.	November 9-16, 1977	Sao Paulo, Brasil
7.	Aug. 21-Sept. 3, 1978	Vienna, Austria
8.	August 9-15, 1979	Tokyo, Japan
9.	Oct. 24-Nov. 1, 1980	Vienna, Austria
10.	October 22-29, 1982	Vienna, Austria
11.	September 23-29, 1983	Tokyo, Japan
12.	Oct. 27-Nov. 3, 1984	Vienna, Austria
13.	June 7-14, 1985	Sydney, Australia
14.	Oct. 25-Nov. 1, 1986	Vienna, Austria
15.	October 22-29, 1988	Vienna, Austria
16.	October 20-27, 1990	Vienna, Austria
17.	May 8-14, 1991	Tokyo, Japan
18.	October 24-Nov. 1, 1992	Vienna, Austria

開催地の会長と相談のうえ、地方の特殊性を折り込んで作成される。今回のプログラムも昨年のウィーンでのものを叩き台にして、天神美夫、故久保久光、山内一弘、平田守男諸先生と相談のうえ、われわれで項目を選択して作ったものである。

Tutorial は基本的には各テーマについての講義と、顕微鏡実習との組み合わせで、Gynecological が3~4日、Non-gynecological が3~4日で、合計7~8日間行われる。

International Tutorial がウィーンでたびたび行われているのは、ウィーンがヨーロッパでは地理的に中心であるので各国から参加しやすいこと、オーストリア入国の際顕微鏡持参者にトラブルがない(国によっては税金

の問題でゴタゴタする由) こと、および Hotel Intercontinental Wien がこの Tutorial に好意的でかなりの割引をしてくれる財政的理由などによるとのことである。

ウィーンでの Tutorial では、朝8時から夜10時まで、午前、午後のコーヒー・ブレイク各15~20分、昼食1時間、夕食1時間半を除いて、まさに朝早くから夜遅くまでブツ続けで行われる。もちろん、日程が7~8日で、Registration を全コース、婦人科系のみ、非婦人科系のみ、および Lecture only と分けてあるので、ヨーロッパ在住の人で毎回適宜のコースをとるといふ人もかなりいる。毎回受講するというファンもかなり多い。

わが国では第3回昭和48年8月10日~15日および第8回昭和54年8月9日~15日を増淵一正先生が会長でホテル・ニューオータニで、第11回(日本での第3回目)昭和58年9月23日~29日栗原操寿先生が会長

で日本都市センターで行われ、今回が第4回目になり、平均すると4回に1回の割合で日本で行われていたことになる。

この間、Faculty Member のうちアメリカ Prof. von Haam, Prof. Reagan, スウェーデン Dr. Zajicek, アメリカ Prof. Frost の諸先生が逝去された。これらの先生方の講義のときの表情や口調がつくづくと思い出される。ご冥福を心よりお祈りする次第である。

今回の Tutorial は韓国をはじめ東南アジア諸国からの参加を得て international な雰囲気が出たが、韓国で昨年細胞学会が発足し、細胞診に大きな関心を持ち始めてきていることは隣国のわれわれにとって嬉しいことである。

International Tutorial on Clinical Cytology のこれまでの歩みを概説した。



編 集 後 記

菊花薫る季節、第6回の指導医会報をお届けいたします。この会報の形式も定着してきて、だんだんに充実した内容になってまいりました。

日本臨床細胞学会が発足して30年を過ぎ、会員が7000名を超える大きな学会となりました。それぞれの会員の臨床細胞診断学に対する接しかた、関わりかたはさまざまであると思われます。今回は、期せずして山辺 徹教授、国井勝昭先生、前田昭太郎先生から、細胞診断学との個人的な係り合いについての玉稿をいただくことができました。また、故水野潤二名誉会長を偲んでよせられた安田迪之先生の追悼文も、形をかえた水野教授と安田先生の臨床細胞学への係り合いの歴史でもあります。いずれも興味深く拝読し、感激しました。膨大な医学の領域からみれば、細胞診断学という狭い領域を形づくる日本臨床細胞学会が、このような深い洞察力を持ち、強い実行力のある方々が合わせて撚る太い綱からできているように思われ、感慨はひとしおでした。すべての会員諸氏はそれぞれの歴史をお持ちでしょうが、この記事をお読みいただいて、何らかの感慨を持つことができたならば、編集者冥利に尽きると考えます。

信田重光教授には、成功裡に終わった International tutorial on clinical cytology の開催に努力されておいででしたが、その経過、状況についての詳しい論文をいただきました。先生方のご努力の結果による国際細胞学会におけるわが国の強力な立場がよく判りました。

半藤 保教授は日本の医学界における日本臨床細胞学会の立場を如実に示され、今後われわれがいかに対処し、前進するかについて述べておられます。確かに、いずれの国でも細胞診断学は日蔭の学問であった時代があります。しかし、同学の士の努力でここまで伸びてきました。先生の論説のように先を明るくせねばなりません。今後も、このような論文の投稿を歓迎します。

寒さに向かいます。ご自愛下さい。

(垣花 昌彦)

細胞診指導医会報告

本年5月29日幕張メッセでの細胞診指導医会で新幹事4名の増員が認められた。新幹事は加藤治文(東京医大外科教授)、野澤志朗(慶應大婦人科教授)、杉下 匡(杏雲堂病院婦人科部長)、矢谷隆一(三重大病理教授)(ABC順)の諸先生である。

よって指導医会の役割分担を下記のごとく決定した。会員諸賢の一層のご支援、ご協力を切望する。

総 務	加藤治文
会 計	野澤志朗
渉 外	天神美夫
学 術	山田 喬
細胞検査士資格更新審査	柴田偉雄
指導医資格更新	杉下 匡, 矢谷隆一
あり方委員会	杉下 匡, 矢谷隆一
無任所	野田起一郎
	杉森 甫

(細胞診指導医会会長 信田重光)

会報編集委員会

委員長：山田 喬 委員：藤井 雅彦, 垣花 昌彦, 野澤 志朗, 上井 良夫